
1人

福田梨華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1人

【Nコード】

N9009G

【作者名】

福田梨華

【あらすじ】

純粹で元気な女の子ヒマワリのような笑顔のリカから薔薇のようなトゲのある女の子へいつからか少しずつ変わって行く人生。闇の世界へ行ってしまふのか…。

第1話

春。

私はピカピカの一年生。

朝起きてご飯を食べ少しドキドキしながら学校へ行く支度をし、行つてきます！と母に言つと、

母は張り切つて

「そこに立つて！写真を撮るから！」

と玄関を出た私に言つと白い壁側に私を立たせ写真を撮つた。

そこにはおばちゃんもいた。

新潟に住むおばちゃんは東京に住む私の家へ入学式の為に来てくれたのだ。

少し恥ずかしいような照れくさいようなでも嬉しい気持ちでいっぱいの私は

おばちゃんと並んで写真を撮つた。

紺色の縦に白い線の入ったジャケットにお揃いの膝丈のスカート。

中にブラウスを着て白い靴下に白い靴。髪の毛は少し茶色のセミロング（地毛だ。）

色も白く目はクリツとした女の子だった。

写真を撮り終わると学校へ向かつた。

ルンルン気分。

ドキドキワクワク。友達百人出来るかな！

私は学校へ。学校の門に着くと、そこには保育園からの友達がいた。ユウタとタケシだ。

ユウタは年長になった時に入って来た子だった。

私は正直ユウタはキライだった。

と言つか苦手だった。

人見知りをしない私は

誰にでもすぐに話し掛けて仲良くなれるから、

その時も

1人ポツンといたユウタに話し掛けた。
しばらく話し掛けているが

ずっと無視。突然顔を上げると私に怒鳴った。

「ボクは男だッ！」ビツクリした。

そう、私は女の子だと思っていたんだ。

髪の毛の長い。男の子。

子供は残酷だ。

私は

「え？そうなの？男の子なの？見えない！女の子みたい！」

そうゆうとプイッと背中を向けてしまった。

それ以来、

ユウタとの記憶はほとんどない。

きつと仲良く一緒に遊んだりしていなかったんだろう。

1つだけ覚えているのは、

保育園で行われたクリスマス会で、

サンタさんからプレゼントを貰う為にホールで輪になり

座る時に隣になったのがスゴク嫌だったのを覚えている。

今で言うキモイ。

そう私は思っていた。

そしてもう1人、

タケシ。

背は小さくて可愛い感じの男の子だった。

保育園の時私の好きな子だった。

「大きくなったら結婚しようね！」

なんて言ってた。

可愛い思い出の1ページだ。

でも、少し私はマせていたのかもしれない。

マせてしまったのかもしれない。

あの日、

保育園のお昼寝の時間。

男の子にイタズラされた事がある。

好きでもない男の子に。

名前はシヨウチャン。

シヨウチャンとは仲良くて、

いつもママゴトの時犬役をかって出た子だった。

あるお昼寝の時間。私達はおしゃべりをしていた。

静かにしなさい！

と先生の声。

またすぐに話し出す。

次に怒られた時にはもう、

みんなで寝るホールから布団を引きずられ別の部屋へ。

2人。先生はお仕置きのつもりだったのだろう。

先生がいなくなってから…

しばらくすると不意にキスをしてきた。

ビックリしたけど、仲良しだったし、

私もおやすみ！とキスをした。

静かに寝なきやいけない！

また怒られてしまう！

そう思つて

眠くもない目をつぶっていたら、次にまたキスをしてきた。

私は先生に怒られちゃうから寝よう？

リカちゃん？

なーに？

口から舌が入つて来た。

やめて！

静かに！先生来ちゃうよ？

ママゴトの時の犬役のシヨウチャンじゃなかった。

手が下に…、

もう1つの手が肩を押さえつける。

逃げられなかった…。
何をされてるのか。
時間が過ぎて行く。
お昼寝の時間が終わる頃、先生が来た。
ホッとした。
やっと終わった。
それからお昼寝の時間は静かに寝るようになった私。
サンタさんはいない。
そう思ったのもこの頃からだろうか。

門の前。

三人で写真を撮った。私は前から見て左側、
タケシは真ん中、ユウタは右。
私はタケシの隣で並んで写真を撮るのが嬉しくて、
斜めに体が動いていた。タケシの肩にぴったりと。

そして次に何故かユウタと2人で撮る事になった私。
私は逆斜めに体を動かして写真を撮った。
気分は落ちたまま、自分のクラスへ向かう。
私一年一組なんだ！クラスに入り、
私の席は廊下側の後ろから2つ目の席。
初めは薄暗かったようにも感じた。
朝だからだろうか。保育園からの友達が数人見えた。

最初は久しぶりに会う幼なじみと話したりした。
でも知らない子が沢山いるなか私はすぐに、
自己紹介をした。
すぐに仲良くなり、友達作りに励んでいた。
しばらくすると、

入学式が始まるので廊下に並びましょう

と言つ声をして、

廊下に並び体育館へ向かつた。

ドキドキの入学式が始まる。

第2話

体育館に入ると、

沢山のお父さんやお母さん、

それから先輩のお兄さんやお姉さん達。

音楽の音に合わせて入場。

校長先生が話す。

優しい顔。

喋り方は少しもたつくような、特徴のある話し方をする先生だった。

先生が発表された。一年一組の先生は、前島先生。

少し年をとっているような…声の女先生。

優しいのかなあ…。

怖い先生だったら…イヤだなあ。

「皆さん宜しくね！」

なんて、子供ながらに作り笑顔が分かってしまって、

これからの学校生活が少し不安になっていた。

お兄さんお姉さんからの歓迎の歌なども終わり。

沢山の拍手で退場。

教室に戻ると、前島先生の挨拶があり、教科書など新しい教材が配られた。

どれもこれもピカピカ。

新しい教科書を開いて匂いを何度も嗅いだ。

新しい教科書の匂いが好きだった。

スゴく嬉しなって、これから

バリバリ勉強するぞお！

と張り切るリカでした。

私には1つ年上の兄がいた。

一年前、兄のそんな姿を見ていたから、早く学校へ行き勉強したい気持ちを膨らませていたのだ。

次に先生の声で、
校庭で写真撮影をした。

私は一番前の右から二番目に座り、
左側に座っていた女の子モモちゃんとそこで仲良くなった。

「私リカ、宜しくね！笑」

「私桃子宜しくね！笑」

「さっきの入学式は少し緊張したね！」

「うん！したね！」

私の右側に座る子とは話しをしていない。
名前はあかねちゃん。

保育園の頃から一緒のあかねちゃん。

「ね〜あかねちゃん！これ貸して？」

「ダメッ！！」

あかねちゃんはいつもダメダメ〜！！

って言う子だったから、一緒に遊んでも全く面白くなかったからだ。

私は新しいお友達作りに目をキラキラさせていたから、
あかねちゃんとは話さなかった。

全く別な世界へ飛び込んだ気持ちになっていた私は、
心機一転新しい自分への一步を踏み出そうとしていた。

小学校生活にも少しずつ慣れて行き、

新鮮な毎日が楽しかった。

1人だけくせ者と思っていた子をのぞけば…。

名前はシバタ。

女の子。

保育園からの友達。

年中さんから入って来た子だった。

いつものように私は話しかけた。

反応は薄く、第一印象は暗い子だなあ〜と思い、私は挨拶をそこそこにパツと離れ元気に走り回っていた。気がつく頃には、

いつも私の後ろにチヨコチヨコくっついて来るようになった。あまり気にせず遊んでいた。

ある日シバタが持っていたハンカチを見た私は

「かしてー！」

「ダメ！」

少しムツとした私は隙を狙って、パツと取ったのだ。すぐに返すつもりで少し意地悪をしてみたのだ。

ウエーン！と大声で泣き出し、

先生の元へ走って行き、

私を睨みつけ指を指す。

私そんな悪い事したあ？！

そんな気持ちにもなったが、

先生に怒られ、謝らされた。

泣き虫なんで大嫌い！

すぐに泣く子が面倒くさかった私は苦手な存在だった。

それから、

遊んでいても少し距離を置くようになった。

それでも泣き虫だから、転ぶと泣いて、遊びに入れてあげないと泣いて、

そのたびに何故か私が先生に叱られて、だから仲良くしたくないんだよ！

と私は思っていた。

「泣き虫毛虫はさんですてるお〜！」

と言った事もある。

おてんば娘だった私は

男の子と遊んでる方が楽しかった。泣かないし、先生に言いつけて怒られる事もない。
ただ男の子と喧嘩もしていたから傷は耐えなかった。

そんなシバタと

偶然にも同じクラスになってしまい、
ある程度の距離を保ちつつもあまり関わらないように…と思っていた。
た。

そんなある日、

シバタは自分がクラスで仲良くなった友達を私に自慢気に紹介してきた。

「私リカ宜しく！」

「カオリでーす宜しく！」

何か苦手…と思った私は仲良くはしていたけど、

私には仲良くなった

モモちゃんとチカちゃんとミカちゃんの4人で遊んでいた。

カオリはものスゴい目立ちたがり屋で、休み時間になると、椅子の上
に立ち上がり

踊りだしたり、歌いだしたり、

なんかスゴいな…この子…。

と思って見ていた。

クラスの男の子達は最初は笑って見ていたが、毎日になると

「まーた始まったよ！うるせー！！」

と言いつ出す子もいたが…、

そんなのお構いなしで

歌い踊り続けるカオリだった。

一年の後半にもなると始まったのが、スカートめくりだった。

毎日スカートめくりから逃げるのが大変だった。

それから二年生になり、

私はスカートをはかなくなった。

母親に私はお願いしたのだ。

「お願いだからスカート買って来ないで！」

「どうして？可愛いのに〜！」

「買って来ても私絶対はかないからッ！」

そう言っていると春休み中に母はスカートではなく、

キュロットパンツを買ってきた。

前から見るとスカートのように見えて、嫌だったが、

めくられてもパンツが見えないからいいかッ！

とそれから私はキュロットパンツをはいて学校へ行く事になった。

それでもめくって来る男の子がいたが、

私はあつかんべ〜！をして相手にしなかった。

クラスの中で一番モテていた男の子がいた。

顔はサルみたいだった。

でも、サッカー少年で運動神経が良くて、

勉強も出来て明るく優しい子だった。

夕八々と私は隣りの席だった。

あれだけ勉強を頑張る！

なんて言っていた私はすぐに挫折…。

そんな私にいつも優しく勉強を教えてくれていた。

いつも

「サルッ！」

「ブスッ！」

と言い合いながら笑っていた。

モテてていたのは知っていたが、
私は保育園のあの日
イタズラされたあの日以来、
男の子を好きにはなれずにいた。
シヨウチャンとは、小学校は離ればなれ。
それを聞いた時は正直ホツとしたのを覚えている。
シヨウチャンは家が病院でその息子だった。
私立の小学校へ行ったのだ。
シヨウチャンは別れる時、
「家はここだから！絶対絶対遊びに来てね！」
と泣いていた。

だから
私は、タハタと仲良くはしていたが、
好きとゆう感情は全くなかったのだ。

カオリとシバタは
タハタを好きな1人だったらしく。
知らなかった私は良く睨まれたりしていた。

バレンタインデーの日にはクラスの女の子が何人もタハタに上げて
いた。
顔を赤くするタハタに、
サルツとからかっていた。

だけど、私は不思議だった。
マセガキだったと思っていたが…。
それも保育園だけ？
私はバレンタインデーに

チョコを好きな人に渡すなんて知らなかった。

みんな何してるの？

どうして、この日にチョコレートを渡すの？

私は上げるなら、自分が食べたいと思っていた。

家には、普段からお菓子があまり無い家で、

買い物に行っても買って貰えなかった。しかもチョコレートなんて

あまり食べれないし、

それなのに他の子に上げるなんて、

不思議でしょうがなかった。家に帰ると私は母に聞いた。

バレンタインって何？

教えてもらってもまだ、バレンタインの日にチョコを

ってゆう事にピンと来なくて、

私はバレンタインデーの日は誰にも上げなかった。

チカちゃんもタハタが好きな1人だった。

私は

「今日タハタに上げるの？」

と聞いた。

チカちゃんは顔を真っ赤にしてうなずいた。

みんなが学校で渡している中、

チカちゃんがタハタに渡している様子もなく、

学校の帰り道、

チカちゃんに聞いた

「渡した？」

「まだあ。どうしよう」

ランドセルを家に置くと、

私はチカちゃんのお家に遊びに行った。家に行くと、チカちゃんは

チョコレートの箱を持ったまま

ソワソワうるうるしていた。

1時間が過ぎた頃だろうか…

決意したのか、

「渡しに行くッ！」

「私もついて行って上げてあげる！」

そうしてタハタの家へ向かった。

団地に住むタハタの家の前につくと、

チカちゃんはクルツと回って帰ろうとした。

「ちよつと！チカちゃん！ここまで来て帰るの！？行くッッ！」

チカちゃんの手をとると階段を上った。玄関の前についた私達。

後はインターホンを押すだけ。

チカちゃんと目を合わすと、

私は力強くうなずいた。

ゆっくりと指がインターホンへ向かう。

反対の手にはチヨコレートの箱を胸に当て、チカちゃんのドキドキがこっちにまで伝わるぐらいだった。

（ピンポーン）

「はあ〜い」

タハタの声だ。

その声を聞いたチカちゃんは、

ガバツと私にチヨコを渡すと

階段を駆け上がって行ってしまった！

何が起きたのか分からず、

ドアが開いた。

「リカ！？」

「ヨッ！笑」

「1人？」

「はい…これ」

「これリカから？笑」

何故かにやけていた。

私はすぐに

「違うヨッ！チカちゃんからだよ！」

「なんだ…。」

（あれ？嬉しくないの？）

私はチカちゃんが隠れている方に目をやると、チカちゃんは目だけこつちを覗き込んでいた。顔が真っ赤だった。

いきなりスゴい勢いで階段を下りてくると私の手をつかみ、

「じゃあね！ばいばい！」

とタハタに言うともまたスゴい勢いで階段を下りていったのだ。

「でも良かったね！」

「うん！」

とスツキリした顔でチカちゃんがうなずき笑った。

それからバレンタインデーも過ぎ、バレンタインデーの出来事も忘れまた元気に走り回っていた私にビックリニュースが飛び込んで来たのだ。

ある日の休み時間、1人の男の子が

「お〜い！みんな聞けよ！タハタ、リカが好きらしいよッ！」

それはたちまちクラス中に広がり、その瞬間から、

私は女の敵になってしまった。

仲の良かったチカちゃんともギクシャクしてしまった。もちろんあの2人からも……。

私は
その日からイジメられるようになった。

第3話

それから私は、

軽い…重い

イジメに合う事になった。

イジメと言っても、

タハタを好きだった子達からだけで、

関係のない子達は普通に話してくれていた。

チカちゃんは

前のように話してくれなくなってしまった。

それはスゴく寂しかった。

(私のせい？私が悪いの？)

そんな姿を見たタハタは、

「リカ…何かゴメンな…」

と隣りの席に座る私にボソツと言った。

バレンタインデーも知らなかった私、

性格も明るく前向きな私は、

イジメをイジメと思っていなかった。

イジメと言っ言葉、

意味さえ知らないのだから。

当然、自分がイジメられるとは思わない。

思ってもいなかった。

この時までには…。

タハタやチカちゃんとは

少し距離が出来てしまったが…。

私は毎日明るく過ごしていた。

ある日、

珍しくシバタとカオリが

私に話し掛けてくると、

「私達、お祈りをしているの！一緒にやらない？」

「お祈り？」

何だかよく分からなかったが、

「うん、いいよ」

と三人で一つの机を囲み座った。

「リカのクーパー貸して？」

「うん？いいよ」

机の上にティッシュを広げると、

「神様にお祈りをする儀式をします！」と言ってから、

私のクーパーを手に取り、

ティッシュの上でクーパーを削り始めた。

順番に端から全色を削りだし、

全て削り終わると、ティッシュでくるみ、

手洗い場に向かってそれを水で濡らした。

何かブツブツお祈りを言っていた。

そうしてお祈りは終わった。

お祈りが終わると、

削ったクーパーはゴミ箱へ…。

全く意味不明だったそのお祈りは、

それから毎日続いた。

断る事が出来なかった私は毎日削られた。

クーパーはすぐに小さくなってしまい、母に買って貰っていた。

でも母には、

そんなお祈りをして無くなっているなんて言えなかった。

ある日、

私は

「何で私のばかりでやるの？」

「もう、止めようヨ！」
勇気を出して言ったが、
無視。

2人は私のクーパーを毎日楽しそうに削っていた。

それから何日か過ぎて、

2人は飽きたのか、神様のお祈りは無くなった。

それと同時に

次は毎日遊びに誘われるようになった。

私は正直遊びたくなかったが、

何となく、断る勇気が出なかった。

私と仲良くしたいから

遊びに誘ってくれているのかと、

思っていたからだ。

2人の遊びは全く面白くなかったが…。

私は女の子の遊びが好きではなかったから

どちらかと言うと、外で走り回っていた方が楽しかった。

2人の遊びはお人形ごっこや

お医者さんごっこ。そこでもちよこちよこ仲間はずれにされたりしていた。

それを2人は楽しんでいたのである。

ある日珍しく外で遊ぼうと2人は言った。

「どこに行くの？」

「私の行ってた幼稚園に行くの」

とカオリは言うつと、

行った事もない道を歩き続けた。

見た事のない風景。

「犬だ！」

「ゴールデンリトリバーって言う犬なのよ！」

倉庫のような工場につながれて飼われていた。

中にはオジサンが大きな木を削っていた。

「オジサンこんにちわ！」

知っているのか、

カオリとオジサンは話をしていた。

私は犬をなでながらオジサンに聞いた。

「何してるんですか？」

オジサンは仕事をしながら、教えてくれた。

「やってみるかい？」

「いいの？」

オジサンに教えて貰いながら

大きく長い木をシュツシュツと削った。

見ていたより、難しかった。

「オジサンありがとう！」

「またいつでもおいで！」

そうするとまた幼稚園に向かい歩き続けた。

結構歩いた。

やっと幼稚園が見えて来た。

そして

ここよ！

と言うと校庭で少し遊で、

もう帰ろうと言うと

またさつきずっと歩いて来た道へ…。

(ただ幼稚園を見せたかっただけなのか？はあ…。)

そしてさつきのオジサンの所を通りかかった。

犬はいるが

オジサンは見当たらない。

カオリは工場の中に入り犬をなでた。
私もなでた。

「ね〜ね！このフタの下に何かがあるか知ってる？」

「フタの下？」

床を指指すと、

何か大きなフタがされているのが見えた。

カオリはそのフタを開けると

「ここにはさつき削った木のクズを入れる所なのよ」

「本当だあ！スゴいね！」

私とシバタは初めて見る木くずの山を見た。
カブトムシの匂いがした。

「あッ！」

「あッ！」

「えッ?!」

カオリは何かを落としたようだ。

「どうしよう」

困ったように言っている。

「オジサン呼んで来た方がいいんじゃない?!」

「オジサンは夕方まで帰らないから無理！」

「じゃあ、どうする?!」

三人は黙った。

急にカオリは思いついたように言った。

「リカちゃん取って来てよ！」と

サラッと言った。

「無理だよ！だってこんなに深いし、木のクズだって沢山あるし！」

「リカちゃん取って来なよ。」

シバタが言った。

(どうして私が?) 2人はニヤッと笑ったように見えた。
ワザとだったんだ。

あそこに物を落としたのは。

私は覚悟を決めた。

恐る恐る下に降りて行った。

木クズにズツポリ埋まって木クズまみれだ。

手探りでカオリが落とした物を探した。

「あッあつた!」

落とし物を見つけ

拾い上げ2人に見せようと顔を上げた瞬間…。

「バタンツ!!」

目の前が急に真っ暗になった。

「何ッ!??」

カオリとシバタは木のフタを閉めたのだ。

「ね〜ッ!!開けてッ!!開けてよ!!」

2人の笑い声がある。

フタの上で2人は

ピョンピョン楽しそうに跳ねていた。

(何やってんだ?せっかく取ってあげたのに…。)

しばらくすると、
開けてくれた。

急に明るくなり眩しくて、
目がチカチカした。

ヨイシヨ!

上にあがり体中についていた木クズを払った。
落とした物をカオリに渡した。

「ありがとう!」
と私に言う

「次はかくれんぼしよう!」

カオリは言う

2人はコソコソ話しをし、

「じゃあジャンケン!」

『ジャンケンポン!』

2人はパー。

私はグー。

「じゃありカちゃん鬼ね!50数えて!」

1 . 2 . 3 . 4 . 5 ∴ 30 ∴

まだ2人は私の目の前にいた。

少し目を開けたら

「ダメ!目開けちゃだめ!」

2人は私の目の前でクスクス笑っていた。

少し嫌な気分になったが、

言われた通りに50数えて、

目を開けた。

2人は目の前にいる…。

「なんで？隠れてないじゃん！」

「わかった！今度はちゃんと隠れるから！」

2人は笑いながら言うと、

また50数えてと言ってきた。

仕方なく私はまた50まで数えた。

1 . 2 . 3 . 4 . 5 ……

数え始めた瞬間、

次はバタバタと、

勢いよく走る音がした。

今度はちゃんと隠れたって私は安心していた。

その足音はドンドンドン遠くなっていった。

最後は聞こえなくなってしまった。

私は不安になりながらも、

必死に50まで数えた。

その50はすごく長く感じた。

最後の方は早口で急いで数えた。

目を開ける。

……。

誰もいない。

辺りを探したが、いない。

いるはずがない。

2人は猛ダツシユで遠くまで走って行ってしまったのだから。初めに来た場所。

右も左も分からない。

2人が走って行ってしまった音を頼りに、とにかく走った。

でも2人の姿はない。

先に家に帰ってしまったのだろう。

私は1人でどうやって帰ったらいいのか分からず、心細くなってしまった。

この時ばかりは、

少し泣きそうになった。

(どうしよう……。)

泣くのをぐっとこらえて、私は

(よし！人に聞こう！)

「あの！すみません！〇〇一丁目はどこですか？」

男の人はビックリしていた。

「え？！〇〇一丁目は…この道を真っ直ぐ行って……」

教えてもらったのはいいが…、

途中まで行くと、

また分からなくなってしまうた。

また不安になって、

心の中で母の顔が浮かんだ。

もう泣きそうだった。

涙目になりながら、

また人に聞いた。

「〇〇一丁目はどこですか…?」

「ここを真っ直ぐ行くと信号があるから、そこを渡ると〇〇一丁目になるよ！」

「そこまで行けば分かるかな?」

「うん!」

「忘れたらいけないと私はお礼も言わず走り出した。」

(ついた!)

いつも行く酒屋さんが見えた。

信号を渡り家までダッシュした。

エレベーターに乗ると、

涙目な私は目をこすり、

何もなかったように家に入った。

「ただいまあ!!」

母の顔を見たら本当にホッとした気持ちになった。

今日1日の出来事が吹っ飛んでいった。次の日から私はあの2人と遊ぶのを止めた。

サヨウナラの挨拶をすると、

すぐに捕まってしまうから、

その前に他の友達と遊ぶ約束をした。

そうしてどうにかあの2人から逃げる事が出来た。

夕八タとの噂話も消えかけたのもあって、

嫌がらせなどもおさまって、

平和な学校生活を送っていた。
二年生も終わりかけた頃、
先生からの報告があった。

タハタとチカちゃんが引越す
と言う知らせだった。

ビックリした。

クラス中ザワつとした。

それから

避けられていたチカちゃんとも

一年生の頃のようにまた仲良くなれた。

引越すまでの間。

今まで話せなかった時間を埋めるかのように…

タハタとは今だ気まずいままだったが、

チカちゃんの方が大事だった私は、

タハタと仲良くする事は

出来なかったのだ。

二年生が終わり…

2人とサヨナラをし…。

三年生の春が来た。

クラス替え。

先生は男の先生になった。

ジャガイモみたいな顔の優しそうな先生だった。

生徒達も変わり、

喋った事もない友達が
顔を揃えていた。

仲の良かった

モモちゃんとミカちゃんとは

クラスは違ってしまった。

（カオリはいないみたいだ。）

（シバタだ！

シバタとまた2年間一緒か…）

肩を下ろす私がいた。

まあしょうがない。

仲良くやろう…。

新しいクラスにもなれて来た頃。

私は1人の男の人に目が止まった。

隣りにいるのは

1つ上の私の兄だ。

兄の横にいる人はだれ？

心臓のドキドキが止まらない。

一目惚れをしたのだ。

第4話

私は一目惚れをしたのだ。

兄は四年生から、

野球をやり始めて、

一緒に野球をしている六年生の先輩だった。

カッコ良くて、

優しかった。

私が初めて、

バレンタインデーの日に

チョコを上げたのも、

その先輩だった。

ドキドキしながら渡したのを覚えてる。

笑顔で

ありがとう！

と言って受け取ってくれた。

「好きです！」

「リカの事好きだけど、オレ今付き合ってる人がいるんだよ！ごめんな！」

と優しく

頭をポンとすると

笑顔で笑いかけてくれた。

さすが先輩だなんて思ってまた好きになっていた。

私の初恋はこんなもんだった。

初恋とはこんなものなんだろうか…。

私が四年生になる頃には
先輩は卒業して
中学生になってしまった。

なんだか、

遠くに行ってしまったように感じた。先輩の記憶も薄れて、

四年生の学校生活を送っていた。

クラスでは、

シバタ & amp; ゴリのコンビがクラスを仕切っていた。
ゴリは男の子。

名前の通りゴリラに似ているからだ。

あのコンビは本当に威張っていた。

学級会でも、

2人の力を使って

やりたい放題だった。

多数決をとる時なんかは、

シバタは女子を睨みつけ、

合図を送り手をあげさせていた。

シバタはカオリとクラスが離れたのが原因なのか、

何かと

リカリカ、

と私にベタベタして来た。

私は四年生になった頃から、

イジメを認識して来た。

シバタは私以外の女の子イジメていた。
順番に1人ずつ…。みんな…
私も含めて、
イジメを止める事が出来なかった。
シバタ& amp ;ゴリの
最強コンビが怖かったからだ。

もし逆らったら、
イジメの対象になるのは自分だと思っていたからだ…。

三年生から始まった

イジメはとにかく、

イジメられる女子が1人

シバタが選んだ人。

それ以外は仲良し、泣く子もいたり

一生懸命イジメられないように

シバタに媚びを売っていたり、

そうゆうのは皆様々だった。

何か気に入らない事があると

「次は○○をイジメるよ？」

と脅したり、

音楽の時間では、

自分の気に入らない歌が始まり、

きっと上手く歌えない曲だったのだろう。

突然、女子の声が小さくなる…

私は辺りを見回すと、

シバタは目でみんなに合図を送っていた。

自分より上手く歌うなって事なのだろうか？

それを無視して歌っている子は、
音楽の授業が終わった後からシカトされ、
みんなもその子をシカトする。

シカトされた子は、シバタに謝りに行くのだ。公園で遊びに行くと、
鬼決めジャンケンをする。

だか私達に、鬼決めジャンケンなどない。
誰が鬼になるかは、シバタ次第だった。

形だけのジャンケンをした後、

「○○鬼ね！」

とシバタ…。

大体：初めはトクちゃんと言つ子からだつた…

「また私？ヤだよ…。」

「いいんだよッ！トクちゃん鬼ね！」

みんなは微妙な顔をしながら、
自分が鬼だと

指名されなくて良かったと、

ホッとしていただろう。

たまに他の子が鬼になる事があるが、
大体トクちゃんだった。

トクちゃんは

泣きそうにため息をつきながらも、
鬼をしていた。

シバタにタッチ！

「えーだめ！ズルいよ！トクちゃん！」
何がズルいのか分からないが…

「トクちゃん鬼！」

シバタは何をしてもいいのだ。鬼ごっこ、缶蹴り、ドロケイ、高鬼、かくれんぼ、

シバタが飽きるまでやっていた。

缶蹴りでは、

鬼が数えている目の前で立ち、

数え終わるとすぐに、

缶を蹴りまた鬼にさせたり、

「また〇〇が鬼だあゝ！へーだあ！」

と憎つたらしい顔をしていた。

楽しかったのは、

おそらくシバタだけだった。

だけど、

みんな怖くて言えずにいた。

そんな日が毎日、学校でも、

学校が終わっても続いていた。

相変わらず、

シバタのワガママなイジメが続く中、

私は三年生の途中から転校してきた

ナーと言う女の子と仲良くなるようになった。

ユウタと同じマンションに住むナーの事を
ユウタから紹介されたのがキツカケだった。

ナーと仲良くなり、何でも話せる友達が出来たのも
ナーが初めてだった。

ナーはしつかり者で明るく元気な女の子だった。
スゴく大好きになり、

急接近した私達。

それを、シバタが見逃す訳もなく。

2人である中によく割り込んで入って来るようになった。

先生から見たら、

仲良し三人組だっただろう。

ある日私は、

「ね〜？ナーはシバタの事好き？」
と少しドキドキしながら聞いた。

「あんまり好きじゃないな！」

ナーのハッキリした言葉に私はハッとした。

(ナーはシバタが怖くないのかな…スゴいな…この子)

「じゃあこれからは、親と出掛けるとか嘘ついて、2人で遊ぼう！」

仲良し三人組は学校だけになった。

学校にいる時だけ我慢すれば、

これからあのワガママに付き合わされる事もなく

大好きなナーと遊べる。

学校の中でのイジメに解放されたのも、ナーと出会ってからだだった。

ナーの心の強さや、

優しさに気づいて、そんなナーと毎日いる事が楽しくてしょうがなかった。

嫌いだったユウタとも仲良くなった。

ナーの家にいると、ユウタがたまに遊びに来たりした。

私はキモイ〜

と思っていたが、

ユウタは母子家庭で、

お母さんはいつも仕事で家にはいなくて、

家事を全て1人でやっている事も知った。

それから私はユウタを嫌いどころか、

尊敬するようになった。

ずっと毎日1人で家の事をやっているなんて…

ナーもそうだった。

だからナーには強さを感じたのかな？

なんて思っていた。

ナーは

「ユウタがこの間、私が熱を出して学校を休んだ時、1人苦しんでいた私の家に、お粥を作って持って来てくれたんだよ！」

スゴいと思えなかった。ユウタもナーも、お母さんがいないのにスゴいなって、

朝ご飯を自分で作って食べるようになったのは、この2人の影響からだった。

毎日嘘をついていた私達、段々おかしいと思ってきたのか…

シバタは

私とナーが遊んでいる、

ナーの家まで来た。

バレないように、

私の自転車まで

ナーの玄関に入れていたのに…

「ねえ！！いるんでしょ！開けてよ！！！」

本当に怖かった…

私達はドキドキしながら、

諦めて帰るのを待っていた。

「あービックリしたね？何でもここまで来たんだろ！」
「怖かったね！」

あの執念深さといったらスゴかった…

次の日からイジメの対象は…

ナーになった…。

朝手紙が回って来た事からだった。

「ナーと話したらダメ。」

ナー以外の女子は、少しずつナーと距離をおくようになった。私はいつも通りナーと話していた。

お昼の時間になると女子グループは1つに固まった。うちのクラスはいつも自由に机を動かして、食べていい事になっていた。

ナーは1人ユウタの男子グループに行ってしまった。

ナーは分かっていた。

私がナーといったら、今度は私がイジメられてしまっつて。

ナーは私から離れていった。1人ポツンと考えていた私。

「ナー?!」

私はナーを呼んだ。

ナーは首を振りあっちに行きなと手で合図する。

後ろから

「リカ！
リカこつち〜！」

机を持たれシバタのグループに……。
ナーイジメのグループになってしまった。

自分が情けなかった。

ナーと一緒に食べるから！

そんな風に言えない自分の弱さに
情けない気持ちだった。

シバタの思い通りになり、

私もシバタの元に帰り、

シバタという毎日が続いた。

シバタの顔は嬉しそうだった。

シバタの口癖は

「リカと私は親友だもんね！」

私は少し笑うのが精一杯だった。

「私の親友はナーだよ！」

この一言が言えなくて…
苦しかった。

シバタは、

私がグループに戻った事で、
気が済んでいたから

お陰で、
ナーをシバタがシカトするぐらいで、
後は何もされずにすんだ。
私はシバタの目を盗んで、
ナーと仲良くしていた。

たまに、仲良くしているのが見つかると、
私とナーを睨みつけ、
勢いよく走って来ると、
私の腕を引っ張り、自分の方に戻すと、
(あっかんべー)
をナーにする。

私とナーは
バカじゃん？みたいな呆れた顔をするのだった。
もちろん本人は言わない。
言えない。
触らぬ神に祟りなし。
そうゆう感じだった。
そんな日が続いた。

ある日、シバタは私に聞いてきた。
『ナーの嫌いな事何か知ってる？』

『何？どうゆう事？』

『嫌いな事！リカ知らない？』

『嫌いな事？…？』

聞いた事がないから分からなかった。

考えている私の腕を引っ張り、
ナーの元へ走って行った。

いつもシカトしてたシバタが珍しく、
ナーに話しかけた。

『ナーの嫌いな事何？何でもいいから教えて?!』

しばらくナーも考えていた。

『三つ編みかな？』ナーは答えた。
ナーはいつもポニーテールだった。

『後は？』

『あと？』

『Gパンかな？』

ナーはいつもスカートかキュロットだった。

私も初めてナーの嫌いな事を知り、

「そうなんだあ笑」と

嫌いな事を知り、

またナーの事を知れたような気になり、
ちよつと嬉しかった。

でも、その後すぐにシバタは

「明日から三つ編みとGパンはいて来て？」

「え？私が嫌いな事じゃん…どうして？……して来なくちゃダメ

「？」

「うん！」

「どうしても？」

「うん！」

シバタはニヤニヤしながら言うと、

ナーは嫌な顔をしながら

「でも…三つ編みはすぐ明日から出来るけど…Gパンは無いから、
買って来なくちゃいけない…」

「じゃあ三つ編みだけでいいから！Gパンは買ったらすぐにはいて
来る事！」

「どうしても？絶対に買わなくちゃダメ？」

「どーしても！絶対！そうじゃないとリカがナーをムシするって！」

何を言い出すんだ！と私は

「え！？」

つと一言づのが

その時の私の精一杯の態度だった。

私は下を向いていた。

ナーは全てを分かっているかのように、覚悟を決めたのか

「わかった！リカに無視されたくないから！日曜日お母さんと買い
に行つて来るから！Gパンをはいて来るのは、来週からになるけど
いい！？」

私はビククリしたままナーの顔を見ていた。

ナーの事をこれほど強いと思ったのは初めてだった。

「うんゝわかった！じゃあねゝ！」

とシバタが言うと

私の腕を引つ張り

その場をさったのだ。

今この事を思いだしても、

胸が苦しくなる。

ナーはあの日、

あの時どんな気持ちだったのかと……。

次の週の月曜日

ナーは約束通り

Gパンに三つ編みで来た。

私はそれを見て

心がゾツとした。

言葉が出てこない。

でも何も言わず

ナーの方へ歩いて行った。

そこへシバタが笑いながら

「本当に履いて来たのゝ？笑

似合っじゃゝん笑」

ナーは苦笑いをしていた。

他の女の子達もみんな寄って来て、
それぞれに言葉を放っていたが

私はサ〜と血が引ける思いで
その時、音は聞こえていないと言った感じだった。

ナーのシカトはなくなったが、
校庭遊びや、放課後での鬼は
いつもナーになった。

毎日毎日毎日毎日。

みんな自分じゃなくてホツとしていた。
ナーが可哀相だった。

そんな事を思っただけでも
私もいじめの中の1人なんだ。
何も出来ない。

そんな毎日が続いたある日、
いつものようにナーが鬼をした時、
急に立ち止まり
泣き出し、
走って帰って行ってしまった。

あの強いナーが…

私は

「ナー!!!」

と叫んび、

追いかけてようとした

シバタが

「ダメ!」

私は足を止め、

「鬼ごっこ止めよ」
みんなで輪になり座って話した。

(ちよつとどーする？泣いて帰っちゃったよ？)
みんなは何が心配だったのか？
口々に話していた。

私は

ナーが泣いて帰ってしまった事に
シヨックを受け
何も喋れなかった。

私はその日から、

ナーと話せなくなってしまった。
ナーを目で追う事はあっても
はなしかけられなかった。

ナーは大人しいグループの中に入り
話していた。

ナーもその日から
私達のグループには入って来なかった。

時々目が合って
私達は止まったが
何も話さなかった。
何も言い出せなかった。

ある日、私は

授業中に突然気持ち悪くなった。
隣の席に座っているカトウに
「キモチ悪い。」

何度も小声で言っではいたが

「大丈夫？もうすぐ授業終わるから！」

「ね〜キモチ悪いよあ〜」

「そんな事言っただってどーするんだよ！」

カトウは困った顔をしていた。

その瞬間

オ、エー！！

おもいつきりヤッてしまった。

カトウのジャンパーに…

床に…

私はキモチ悪さと

恥ずかしさで、

泣いていた。

教室中はサーーっと

引いた瞬間、

幼なじみの男の子のナカジマが

「オイ！リカがゲロ吐いたぞお！」

教室はザワザワ

シバタが

「うわあ！キモチ悪い！」

先生が

「大丈夫か？」

隣にいたカトウは

「オイ！ふざけんなよ！」

泣いていた私の目に

ナーの顔が見えた。

ナーも手で口をおさえ
ヤダ

みたいな顔をしていた。

先生は急に怒鳴った。

「オイ！オイ！

お前ら！

普段仲良くしている友達が吐いたら、何もしないのか！？
それでも友達か！！」

その言葉を聞いた男子達は

立ち上がり

吐いたものを一生懸命ふき出した。

他の女の子も拭いてくれた。

先生と床を拭きながら、

もらいゲロをする男子もいた。

拭いても拭いても、床がキレイにならなかった。

今思い出すと可笑しい。

何回床を拭いただろうか？

何もしないで立っている人もいた。

その中にシバタもいた。

ナーもいた。

私だったら拭いただろうか？

あの時、私じゃなくて

他の子が吐いたら、

率先して拭けただろうか？

キモチ悪い、臭い、と言つて、
やらなかったかもしれない。
だから拭かなかった人に文句を言うつもりも
気持ちもない。
しかたのない事だと思う。

ただ拭いてくれた友達の仕事は一生忘れられない。

あの時、
拭いてくれた。

大丈夫？と言つてくれた人

私は嬉しかった。

でも逆に

普段仲良くしていた友達が拭いてくれなかった人も忘れられないも
のだ。

でもそれは何故なのか？

私は考えた…

私が今までしていた事がこうなったんじゃないか？

親友だと思っていたナーにも……

自分がいけないから……

こんな時誰も助けしてくれないんだと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9009g/>

1人

2011年1月4日02時57分発行